

かめいどから

亀戸から

特別号

1972.5

乱調社
編集 亀戸恒世
発行 東京・江東区大島
36-2 米津所

「自由」の……

今がその時ではないか

戸駒恒世

ボクが「自連」を知ったのは、
加だか1年と少し前にすぎない。
郵便で「自連」が届くようになった。
てまだ半年しか経っていない。

具体性の有へ

昨年12月、大阪に行った。す
とBアジトにいて、Aアジトは行
かなかつた。はつきり云つとへ向
丹をを訪ねたのだ。(その時ボ
クは社員であつたか?)

その時丁度Bアジトで35号の編
集会があり、編集社員の人々と
顔を合わせた。

「このようにタチリないものでは
なまにそれが社員ということに
なるのやろか」と、社員であり
ながら社員であつた時を肯定せ
ず、常に全向に力強い集中
意識をもたぬがゆゑに自をそう
でないとした讀者

へ自連34号論文

ボクはかなりひどく既成の組織
観に育ちてゐるらしく、編集会
議にも、35号18にも同席したとし
か思はない。

もしボクみになのが典型的な
自連讀者だとしたら――

多くの非商業的な自主流通(?)
出版物がさうであるように、作り
手と受け手のへそれへに対する態
度の裂け目は余りにも大きい。
へそれへが自連であり、作り手が
やはりへへ編集社員でしかない
としたら、やっぱり無残だ。

今ではかなりちがつてきている
けれども、その頃ボクの頭の中に
あつたのは自由連合という観念の
空転であり、「自連」における自
由連合の具現」という問題は姓
し、「自連」はその自由連合の詮
理の理解を助ける為の「例」にし
かすぎなかつた。

観念としての自由連合、スロー
カン(?)としての自由連合(も
一度云つたら、自由連合の作り
れぬ自由連合)は、その生き生き
とした意味を失つてしまつた。
その自由連合をへなくともボク
の甲で、具体性の方へ近づけたの
は、自由連合紙(社)に他なら
ない。

連合の可能性

自連37号が38号と一緒に5月10

日頃届いたので(38号は東京で4
月中に手に入れた)。座刊の話
はそれ迄知らなかつた。率直など
ころ、小川信治の「座刊」の提案
を読んだ時、社内報で下条がある
ぶが云つてゐる。やめないでほし
い」といふ一行だけの感覚が浮か
んできたのだ。けれどもその提案
の理由は納得できるし、――
といふことで、そのへんの自分の
考えをはつきりしたいと思つて、
の文章をかきはじめた。
ぼくの手許には、言葉がつづか

なく、かきかけにまゝのアンケートが
おきつばなしになつてゐる。媒体
論以降のそれは著るしい。

はじめは「自由連合紙(社)」が
どうにも促さなければならないとい
のであり、34号以降は「媒体にな
りきれないのではないか」とい
のが呈部にかいてある。そして今
でも、自連を媒体にした向うに
は何も視えて来ない。そのへ視
てこない原因はボクが読む行為
の中で、逆に自連社全体に對して
(無論、讀者・編集社員を含めた
ものに)対峙の姿勢をとらうとし
ていないからではないかと心の片
隅で思いつつも、やはり連合の媒
体になり得ていないからだと思
ておく。さう云ふのは、ボクは
「読む行為のへ共同性」とい
のが感じられない(わからな
云つた方が良いかもしれない)と
いふ事が前提としてあるのだが。

ボクがへ自連を受け取り、封を
切つて読む行為の中で、へ自連
そのものの作り手、書き手、送り
手たちへ自連社へ総体を意識し
きれないへ自連社員総体が、ボク
に対峙の姿勢をとつてゐる」と思
ふのは、ボクが自連社員総体
と共有しうる何ものをももつてい
ないからではないか。へ自連社員
の小さな読むモデルとしての「自
連」以外に、さう云ふ時に小川
信治が座刊の理由としてあげる、
②状況がかわつてゐるのに紙面は
あまりかわつていない時代とス
レてゐるんじゃないかと裏面へ

というのはかなり決定的だ。みんなが同じようにズレていけば良いのだが、やっぱりズレ方にも個人差がある。(時代とズレていないというのがどういふことかわからないが)

その個人差のあるヘズレンが、奥はみえきまわってだかつて自連によりひかっているのだ。周囲多恵子さんのように、ラディカリストたちがあつてしまったのでその周辺にいた若い人々が流れそうになってつかまえてしまった。ワラニと自連に他ならなかったのだ。ホント云つてボクもそのワラをつかんだ一人だ。自連はそんな種々雑多のまっかかりに消化不良を起こしているんじゃないか。中央から下部に強引な呪術をかけたそのへん、かかリに施さなければならないけれど、自連はその術をもって酔わせることは出来まいはずなんだ。だからその消化不良の特効薬は恐ろしくないだろう。自連そのものについての問題の深化だけが、まさにヘズの時々を鮮明にし、長に原因療法の出まわりを告げるにうかない。そしてその治療を自づかすのはヘズの時々を意図した社員であり、へばくらの目指す新しい運動、新しい組織づくり、かがめっているのだ。それは、一内報や手紙にある本能的な何かとは、それを出す人間の行動に従属しているということだ。——というその本質的な何かを、へ自由連目へが持つことが出来るかどうか、へ連目の可能性へがかかっているというんだ。

日本アナキスト連盟の解散と新出抜ス

今、市川は戦後のアナキスト運動の年表を依っている。その中で興味深いのは、運動主体として活発化しているのがへ日本アナキスト連盟の結成の頃と、解散の頃だということだ。前者は、連盟機関紙へ平民新聞への列車販売などの宣伝活動、各地の小集団の発足等戦後の状況状況を市川フリとさせる。後者の場合、丁度反響の斗争をはしり(？)としたべ反戦の運動に象徴的な、俗に云う60年代後半の状況がある。

どうにも舌足らずになるので、(それに言葉が出て来ない)アナキスト連盟「自由連目」最終号に大峰杉夫という人物がへ日本アナキスト連盟の解散と「自連」の出發と題するかなり面白い文章をかいているので、その版スィで残りの紙面を埋める。

新しい「自由連目」はすべてのアナキストの「機関紙」として、それの人たちの当面の、目前の運動の必要に応じて、実際の役に立つてはびくするものにならなければならない。そのことはみずからの要求、みずからの運動の状況に応じて、いわば自分自身のためにこそ書き、つくり、くばり、ひろめてゆく新聞にしなければならないというところもある。

「自由連目」の発行そのものを自己目的としてはならず、原稿、編集、配布、拡張、といったさまざまな

まは作業にそれそれ参加し、そのような共同作業を通じて新しい連帯をつよめひろげ、そうして新しいアナキストの、あるべき「自由連目」の實體が自己形成されてゆくことこそ意味があり、発行のためのそのようなプロセスこそ運動としての意義があると私は考える。

——新しい自由連目は新組織をむかへて一切の既成左翼の機関紙とは歴史的にことなり、発行のプロセスにおいてことなる、自己と直結した、単なる宣伝啓蒙やムード作りではない、自己確立、自己形成としての新聞となることにより、新しいアナキストの新聞の尊厳を示さなければならぬ。そうすることによって、はじめてアナキズムの諸組織が自立し、自己増殖し、新しい連盟をかたちづけてゆくことを望見することが出来るだろう。

そうであれば連盟解散の意味はこのへ消そうけてしまうことになる。「自由連目」をだすことによりって運動し、運動することによって出てゆくという循環こそが「自由連目」をだすものになるだろう。

編集長

マブボダ

ホージンソン

アワ……



とる度喝するのです。